

数教と子ども

北海道算数数学教育会
小学校部会 札幌支部
平成11年10月14日発行
No. 97

「教師の主体性の重視」

北数教札幌支部副支部長
札幌市立あやめ野小学校長
西村 興起

西暦2000年まで、あと3か月を切りました。予測し難い急激な変化が続く社会にあって、学校教育には、21世紀における生涯学習の基礎を培うという観点から、社会の変化に主体的に対応し、心豊かでたくましく生きていくことのできる児童生徒の育成することが求められています。

平成の時代に入ってから、『いじめ・不登校』が目立ち始め、今では、教育に関わる我国の大きな社会問題になっています。

また、マスコミでは、昨年よりよく学級崩壊・学校崩壊の状況が報じられるようになってきました。

これらいじめ・不登校、学級・学校崩壊等が生まれてくるのは、簡単な理由からでなく、要因が複雑化しているのは間違いないことだと思います。

こういう時代にこそ、教育の役割が大きく期待されて来るのではないのでしょうか。私たち教師は子供にとってわかりやすい授業、楽しく学ぶ授業を今まで以上に目指していかなければならないのではないのでしょうか。

2002年に向けて、来年度から移行措置が始まります。

算数科において、目標の改訂からは、

- ◎ゆとりをもって作業的・体験的な活動など算数的活動に取り組み、数量や図形についての豊かな感覚を育てるとともに、考える力を高める。
- ◎計算の意味の理解を深め、計算の仕方を考え、基礎的・基本的な計算の技能を繰り返し学習し確実に身に付けることができるようにする。

の2つのことが移行の重点になるといえます。

また、実生活における様々な事象との関連を図りつつ、作業的・体験的な活動など算数的活動を積極的に取り入れるように改訂され、算数教育の充実をより図っていく必要があります。

子供にとって、わかる授業であれば、学級が楽しくなり、学校に来るのが楽しくなる筈です。

こう考えてみると、私たち教師の教材研究がより重要視されてくるし、より教師一人一人の授業に臨む主体性が問われてくるのではないのでしょうか。

『自分が変われば子供は変わる。つまり、教師自らが勉強し努力する姿勢を示せば、子供が持つ光るものを引き出し、見いだすことができる。』とされています。すなわち、教師の主体性が、子供にも強く伝わって、子供の主体性にもつながっていくものと考えます。

私は以前、ある書物で『米を作るには米について、花を育てるにはその花について「知ること」・「理解すること」なくしては、立派に育てることはできない。』と書かれていたことを思い出し子供の教育に当たる教師にとっても、これはまったく同じで、子供理解なくしてよい教育の実践は期待できないと思っています。

「教育は、子供理解に始まって、子供理解に終わる」とさえも言われています。

私たち算数科の教科を窓口にして共同研究をしている者にとって、算数科の指導を通して、さらに教師の主体性の重視を考えていきたいものです。